

アトリエ 琉游舎 だより 96号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2021年1月13日発行

小正月・左義長

(こしょうがつ)

(さぎちょう)

- 元日を中心にする「大正月」に対して1月15日前後を「小正月」と呼びます。実った稲穂に見立て、小さく切った紅白のお餅を枝に刺し室内に飾ったり神棚に供えるなど、農作物の豊作を願う行事が行われます。神社では正月飾りやお札を燃やすどんとやきが行われます。
- どんとやきは本来「左義長」と呼ばれていました。地域によってはまだこの言葉が残っているようです。左義長の語源には諸説あるようですが、起源は平安時代の悪魔祓いの儀式まで遡ります。陰陽師が宮中で行っていたものが民間にも広まり、広く全国に普及していき現在では1年の始まりに無病息災や五穀豊穰を祈る行事となっています。道祖神祭・さいの神・鬼火たき・ほんけんぎょう、などと呼ばれていますが、栃木県北部はどんとやきですね。
- 旧暦では小正月が新年最初の満月の日にあたり、左義長は新春の小正月、満月の夜に開催される火祭りのことです。満月と神聖な火による浄化の力で集落の人々の1年間の災いを払い、豊作や商売繁盛、家内安全、無病息災、子孫繁栄を願うのです。この願いは、世界平和などという大それたものではありません。私たち庶民のささやかな願いです。この小さな願いを各々が実現していくこと、それがこの世の中が豊かで幸せになっていくことなのでしょう。
- 私達が「願い」の実現を「誓い」、各人が日々を楽しく過ごすことを心がけるならば、この一年も良い年になることでしょう。昨年は「コロナ禍のせいで散々な年だった」と落胆するか「いろいろあったが新年も無事に迎えられて有り難い」と感謝するかは雲泥の差です。
- 私は未だ新型コロナが猛威を振るう新年を感謝とともに迎えました。怒り悩み悲しむばかりのストレスの日々は人の免疫力を低下させるようです。マスク・手洗い・三密忌避の対策をとりながらも、精神的な感染症対策として、心安らかに過ごすことのできた日々を感謝すること、これが私の最大の新型コロナ予防策です。皆さんもどうぞお試しあれ。

写経会

2月7日(日)
13時半から

詩話会

2月13日(土)
13時半から

居酒屋の会

2月25日(木)
16時半から

映画会

毎週木曜日
13時半から

読書会

13時半から
2月9日(火)

日蓮聖人の「立正安国論」を読みます。
テキストと資料をご用意してお待ちしています

1月中の琉游舎定例会は休止いたします

1月16日(土) 詩話会、1月25日(月) 居酒屋の会
 1月26日(火) 読書会、1月21日28日(木) 映画会

2月の予定は欄外の通りです。実施については状況を見てまたお知らせいたします。
 定例会は休止ですが、琉游舎は毎日開いています。お話しや休憩、息抜きに
 是非、琉游舎へお越し下さい。お待ちしております。

駅伝は日本発祥の競技です。日本以外の国にも普及させようと、国際陸上競技連盟公認の大会が日本で開催されていたこともありましたがいつの間にか立ち消えとなり、現在日本以外ではほぼ実施されていない極めて日本的な競技です。柔道、競輪、空手も同じく日本発祥の競技ですが今では世界中の人に愛されオリンピック種目にもなっています。一方駅伝は世界に普及しませんでした。何故でしょうか。私はその理由を箱根駅伝の復路スタート風景とゴール地点の読売新聞本社前にみて取りました。以下私の記述は正月の風物詩、箱根駅伝を貶め否定するものではありません。何故これほど日本人に愛される競技が世界では見向きもされないのかという理由は、お釈迦様がそこから逃れることが悟りへの道だと教えていたそこへ、日本人はまたいつのまにか嬉々として舞い戻ってしまっている理由と底流で繋がっていると私は考えているからです。

復路は前日のゴールタイム差に応じた一人ずつでの時差スタート。数秒前からコールが始まり、5秒前4, 3, 2, 1、そして0秒と同時にランナーの前の小旗がさぁ行け（ハイドー）とばかり振り上げられ、人は手繰り寄せられるように道に駆け出します。襷をゴール地点までどのチームよりも早くつなぎ切ることが目的の競技。たった一人で道に押し出されるランナーは孤独に見えますが、実は襷という手綱で次のランナーへと結ばれていくのです。手綱を操るものは絆という名の一体感。ランナーを介して見えざる騎手（絆）が手綱を操り、箱根から東京大手町まで一本の綱が強固につながっています。そのスタート光景は不謹慎かもしれませんが私には次々と馬場に押し出される競走馬に見えてきてしまったのです。その襷を受け取ってしまったからには道を外れることも休むことも許されず、ただ絆に縛られてゴールを目指すしかないランナーたち。自分の為には走るのではなく襷をつなぐために走ることが喜びと教えられたランナーたち。襷の絆はいつの間にか馬などの動物を繋ぎ止める束縛の綱に見えてきてしまいました。絆（ほだし）を打たれた彼らを引っ張っている先端はゴールの大手町読売新聞社前に設置されている「絆の像」に繋がっていました。これは90回目の箱根駅伝を記念したモニュメントだそうです。台座には大きく「絆」と刻まれています。

前々回「絆（きずな・ほだし）」について書いたので、言葉の原義については再度述べませんが、日本以外の国がこの絆のリレーを好まないことは容易に理解できます。彼らの歴史は、奴隷からの解放、移動や経済活動の自由、人権の獲得など、束縛する絆から自分自身を解き放つための戦いの歴史です。それは多くの犠牲によって勝ち取った人間の基本的な権利です。その権利をみすみす自分から放棄して喜んで絆の縛りに就くことなど考えられません。それはスポーツでも同じです。彼らは個人能力の集積がチームの求心力を高めると考えるのに対し、日本人はチームへの求心力（絆）が集団の能力を引き出すと考えているからなのです。

仏教は自分と何かを結ぶ絆を断ち切ることが出発点です。お釈迦様は家族や社会の絆は貪欲や愛憎や怒りを生み出す源泉と考えたのです。「絆に囚われていることがこの世の苦しみの原因です。だからその束縛の絆を一度断ち切りなさい。そして自由になりなさい。そこから安らぎの処に向かって歩き続けなさい。」お釈迦様の教えはかくもシンプルです。絆の断ち切り方、安らぎの処やそこに向かう歩き方などが各宗派の教えの違いとなっているだけです。「愛欲を淨らかだと見なす人には、愛執がますます増大する。この人は実に束縛の絆を堅固たらしめる。あれこれの考えをしずめるのを楽しみ、身体などを不浄であると観じて修する人は、実に悪魔の束縛の絆をとりのぞき、断ち切るであろう。」^{注1}原始経典を開くとあちこちに絆が執着

（煩悩）が心理的な絆となって心の自由を奪っているという認識の下に、仏教は悟りの道（自由）へと歩み始めました。それは一神教の世界が、人は神の下では平等であるという「信」によって社会的血縁的関係性を解き放ち個人の自由を獲得していったことと、一見「自由」という語彙に於いては類似しているように見えます。しかし根本的な違いがあります。仏教は絆を解き放ち全き自由を獲得したところから安らぎの処への歩みが始まります。一神教は神の手元から伸びる絆に各人が固く結ばれるところから社会的自由獲得への歩みが始まります。神と人との絆が深く結ばれば結ばれるほど、彼らは強く自由を希求するのです。

お釈迦様の教えに導かれ絆を解き放ち歩み始めた私たち仏の弟子たちは、お釈迦様が亡くなられて二千数百年を経て、今、関係性の糸を求めて彷徨っているようです。どんなに観念で関係性から自由になろうとも、生きている限り関係性の中で生きていかなければ私たちは生きてはいけません。お釈迦様は「絆」は断ち切るべきものと断じています。しかし「関係性」こそが、もののありようのありのまま、実相、真如と教えています。「縁りて起こる」「縁起」「縁」です。お釈迦様は「絆」の関係性から自由になり「縁」の糸によって新たに編み込まれるありのままの関係性の中を歩んで行きなさいと私たちに教えて下さっているのです。束縛の絆を深めるための日々は楽しいはずはありません。私たちが日々を楽しく豊かに心安らかに過ごす日々は、全き自由を得ることで可能となったありのままの「縁」を、拡げ深める日々そのものなのです。

言論によって社会を制御する機能を持つ機関にとって、「言葉」は命そのものです。新聞社の前に置かれた像の「絆」の文字は言葉の誤用か、意味転化の推進か、絆で社会を制御したいという 琉游舎：戸井 出琉・恭子 本音か。関係性の根本にあるものが自由（縁）か束縛（絆）か、それは お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152 平等か服従かということと同じです。「言葉」を殺してはなりません。 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850